

日本キリスト教会大阪北教会
2016年8月7日(日)礼拝説教 牧師 森田幸男
聖書 ヨハネによる福音書12章12～19節

「12 その翌日、祭りに来ていた大勢の群衆は、イエスがエルサレムに来られると聞き、13 なつめやしの枝を持って迎えに出た。そして叫び続けた。『ホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように、イスラエルの王に。』 14 イエスはろばの子を見つけて、お乗りになった。次のように書いてあるとおりでである。15 『シオンの娘よ、恐れるな。見よ、お前の王がおいでになる、ろばの子に乗って。』 16 弟子たちは最初これらのことが分からなかったが、イエスが栄光を受けられたとき、それがイエスについて書かれたものであり、人々がそのとおりにイエスにしたということを思い出した。 17 イエスがラザロを墓から呼び出して、死者の中からよみがえらせたとき一緒にいた群衆は、その証しをしていた。18 群衆がイエスを出迎えたのも、イエスがこのようなしるしをなさったと聞いていたからである。19 そこで、ファリサイ派の人々は互いに言った。『見よ、何をしても無駄だ。世をあげてあの男について行ったではないか。』」

説教 「大勢の群衆、キリストを歓迎する」

◆私は21歳の春に「あなたの体を神に喜ばれる生きた聖なる供え物として献げなさい」との神様の召しを受けて東京の神学校に行きました。それからもう半世紀以上経ちます。東京では蒲田御園教会に神学校時代6年間通いました。その当時の牧師は栗原久雄先生で、副牧師は私の恩師宇田達夫先生でした。その当時はこの教会も夕礼拝をするのが普通でした。朝礼拝は栗原牧師が説教をされ、夕礼拝は宇田先生が説教をされました。それでも半世紀以上経つのですが、ある日の栗原牧師の説教の一節を今でもはっきりと覚えています。それはこういう1節であります。

「神はイエス・キリストにおいてご自身の義を示されました。神の義とは、罪人を裁いて正道に戻すことであります。それが救いであります」との1節であります。

◆従って、救いを受領に先立って、真の悔い改めがなければなりません。繰り返し申して来ましたように「悔い改め」とは「理解の根源的な改まり」のことです。つまり、この自分は、永遠の滅亡にのみ値するという自己理解、自己認識です。それ以外の未来は考えることができないということです。これがキリストにおける神の義を示された者の明確な自己理解であります。にもかかわらず、そのような者が不思議にも赦されて、新しい命、復活の命に生かされる。これがイエス・キリストの十字架の贖い、犠牲による、救いであります。従って、私たちに、いささかでも己を誇る自己義認の兆候が見られるならば、それは身の破滅であります。

◆つい先程、讚美歌120番をご一緒に今日も歌いました。この讚美歌の歌詞は、ご承知のように、旧約聖書の詩編第23篇から取られています。この詩編は本当に聖書のメッセージを凝縮したものであります。今日、改めてそう思わせられました。

「主はわがかいぬし われはひつじ みめぐみによりて すべて足れり」3節は「主はわが魂 生きかえらせ 正しき道へと みちびきたもう」。正にこのことを栗原牧師は仰ったのです。「神の義とは、罪人を裁いて正道に戻すことであります。」この3節には罪の赦しと復活・再生が歌われています。そして5節です。「恵みにあふるる うたげひらき 油そそぎたもう わが頭に」。

◆本日、私たちはこの礼拝において聖餐式に与ります。聖餐式の主は、司式を致し

まず牧師の私ではありません。正に復活の主イエス。キリストが礼拝と聖餐式の主であられます。正に主ご自身が中心にい給うて、恵みに溢れる宴を開いて、わたしたちの頭に油そそいで、この宴に与らせてくださるのであります。先日、ルターの言葉を紹介いたしました。ルターはクリスチャンのことを「小さいキリスト」と表現いたしました。つまりこの宴においては、主イエス様が私たちに油を注いで、わたしたち一人一人を「小さいキリスト」任命し、十字架に裂かれた肉と流された血に与るように召し給うるのであります。ですから、私たちのこの体が、イエス様の十字架に裂かれた肉と流された血が私たちの肉と血になるというのであります。ですから、私たちは正に「小さいキリスト」になるわけでありませぬ。そのような次第で、この讚美歌の 120 番、詩編 23 篇の持つ広がりや深さは計り知れませぬ。

◆それで今日の聖書の箇所、12 章 12 節から、私たちが「受難週」と呼んでおります、イエス様の地上の歩み最後の 1 週間に入るのであります。その受難週の初日、日曜日のことが今日の箇所に当たるわけです。わたしたちが「棕櫚の日曜日」と呼んでいる日であります。それでイエス様はエルサレムに上ることは、ご自分の命を危険に陥れるという事をよくよく知り、覚悟の上で、この過ぎ越しの祭りのためにエルサレムに上られたのであります。すると 12 節にありますように、「祭りに来ていた大勢の群衆は、イエスがエルサレムに来られると聞き、なつめやしの枝を持って迎えに出、そして、『ホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように、イスラエルの王に』と叫び、歓呼して迎えたのであります。民衆は、このようにエルサレムに来られたイエス様をイスラエルの王として迎えたのであります。

◆「ホサナ」とは、こういう時のメシヤを歓迎する時の叫び声であります。意味は「今、救い給え」という意味のヘブライ語であります。この迎え方は、凱旋將軍、戦勝の王を迎える迎え方であります。ところが 14 節にこのようにあります。「見よ、イエスはろばの子を見つけて、お乗りになった。次のように書いてあるとおりであります。『シオンの娘よ、恐れるな。見よ、お前の王がおいでになる、ろばの子に乗って。』」先日、おさらいとして、「キリスト」というのは称号であって、いずれにしても神様がそのような者を立てて遣わされる時は、ご自身の御心を民にお告げになるためであります。「シオンの娘よ、恐れるな。見よ、お前の王がおいでになる、ろばの子に乗って」という言葉は旧約聖書のゼカリヤ書からの引用であります。

◆ゼカリヤ書を見ますと、イスラエルの民は、この世界に神の祝福をもたらす使命を与えられて選ばれた民であるにもかかわらず、その民が御心から外れている。そういう時に神様は預言者を立て、ご自身の御心をお示しになるわけでありませぬ。預言者の使命は神の救い、神の義の告知にあります。神の義とは罪人を裁いて正道に戻す事です。これが預言者の中の預言者イエス様の使命でありました。ですから 12 章 15 節もこれはゼカリヤ書 9 章 9 節にある言葉でありますけれども、神のみ心から逸れたイスラエルを正道に戻すために神様がイエス様をお遣わしになった、そういう旧約の預言が、今このような形で成就したのだということを表しております。

◆今日は日曜学校で子どもたちにイエス様の十字架と復活という題で、8 枚ものの紙芝居を使って説教しました。1 枚目は棕櫚の葉を打ち振ってイエス様を歓迎している絵です。ところが 6 枚目になると、二人の犯罪人と一緒に十字架に架けられて死刑になっている絵です。たった 5～6 日で、民衆のイエス様への対応が逆転するのです。「主の名によって来られた方に祝福あるように。イスラエルの王に。」この

方こそ国を立て直してくださる王なのだというふうに歓迎していたのに、数日後には、そのイエスさまを群衆が「十字架につけよ、十字架につけよ」と叫んでいる。そこで、ユダヤの総督ピラトが、バラバという犯罪人を獄から連れて来ます。祭りの時に特赦で、罪人を1人開放するという習慣があったのです。「あなたたちはバラバとイエスのどちらを開放してほしいのか」と聞くと、民衆は、「バラバを！」と叫びます。「それではあなた方がメシヤとして迎えたこのイエスをどうするのか」と問うと、民衆は、「十字架につけろ！十字架につけろ！」と叫ぶという、思いもしない展開になっていくのです。そのような紙芝居を見ながら今日は小学生、中学生と思えないような高度な質問がいっぱい出てきた、日曜学校でした。

◆人々が求めているメシヤ・王は、力をもってローマの支配を覆してくれる王です。聖書を読むとき、私たちに出来たイメージがありますから、なかなかそういうふうには読めないのですが、これも神学校時代の経験なのですが、聖書通読の授業がありました。ヨハネによる福音書6章1節～15節を読んだときのことです。「え、そうなんだ」と、今までそんなふうにも思ってもみなかった読み方を木下順次先生が教えてくれました。ここは5千人に食べ物を与える話ですね。荒野の奇跡です。イスラエルの民は今で言う難民的な生活をしている者が多かったわけです。その男だけで5千人もの人をイエス様はパン5つと魚2匹で養われるのです。そのことがずっーと書いてありまして、最後の15節をごらんください。「イエスは人々が来て、自分を王にするために連れて行こうとしているのを知り、ひとりでも山に退かれた」。この5千人の男たちというのは妻もお子様もおりという家族の男だけでも5千人、女性や子供をいれると何万という人数になるでしょう。ところが木下牧師の解説は、10節の「イエスは、『人々を座らせなさい』と言われた。そこには草がたくさん生えていた。男たちはそこに座ったが、その数はおよそ5千人であった」とあります。この男たちはイエス様を王にするために連れて行こうとし、イエス様はそこから退かれた、とあります。ですからこの5千人もの男たちとは、ただの家庭の男でなくて、軍事的訓練を受けた男5千人なのだ。だからイエス様を王にしようとする、そういう思いを持った男5千人なのだ、ということですとの、説明を受けて目を開かれた思いがいたしました。人々は、苦しい生活の中で本当に自分たちを過酷な支配から解放してくれる王、そういう王を求めたのであります。けれどもイエス様はその道をとられなかったのです。猛々しい軍馬ではなく、純朴な子ロバに乗ってエルサレムに入られたのです。

◆今日の箇所は17節以下にこうあります。「17 イエスがラザロを墓から呼び出して、死者の中からよみがえらせたとき一緒にいた群衆は、その証しをしていた。18 群衆がイエスを出迎えたのも、イエスがこのようなしるしをなさったと聞いていたからである」と。つまり死んで4日経つラザロをイエス・キリストが復活させ給うたことを目撃していた人たちが多くいるわけです。そのことを聞いた群衆がイエス様をとり囲んだ。だから群衆が聞いた王のイメージは本当に力を持って助けてくれる、癒しを与えてくれる、そのようなところに民衆の期待があるわけです。それを見たパリサイ派の指導者たちは、イエスを葬ろうとします。こういうとんでもない律法破りは生かしておけない。このように、民衆がイエスを歓呼して迎えたのは、イエス様が、このような奇跡を行なわれたことを聞いていたからです。そのようなイメージでイエス様を迎えるのでありますけれども、イエス様のとられた道はその

ような道ではなかった。司会者のお祈りにもありましたが、昨日6日の広島平和記念式典で、広島市長がオバマ大統領の演説の1節を引用されていました。「武力を恐れず平和の道を歩もう。私自身の国と同様、核を保有する国々は恐怖の論理から逃れ、核兵器のない世界を追求する勇気を持たなければならない。」つまり言うところは核排除です。そしてこの核は今や軍事力の象徴です。ですから新しいものが開発されたら、それを抑えるためにもっと高度なものをつくらなければならない。この軍事力の競争が「恐怖の論理」ですね。イエス様が選ばれた道は、軍事的王の道ではなくて、十字架への道であります。

◆それで、男だけでも5千人を養うとか、病を癒すとか、それは人間としての切実な問題を反映しています。そのことについて聖書はどのように語っているか。先ほど讚美歌120番の3節を読みましたが、1節は「主はわがかいぬし われはひつじみめぐみによりて すべて足れり」です。この方の導きに従う時に満たされるということです。2節は「青草の原に われを伏させ 憩いの水辺に 伴いたもう」です。これは日々の養いのことですね。草を食べ、水を飲まない生きて行けない。人間も同じです。時に病みます。時に失敗します。そういう者が癒しを求め、職を求めるのは当然のことです。先週申しましたように私の7つ違いの弟が肝臓がんの宣告を受けて施すすべがありませんとの告知を受けました。私は毎日「弟の病を癒してください」というお祈りをしています。そんなことで、自分の肉親、家族、親しい者が病めば、どんなことをしてでも治ってほしいと思うのは人の情です。イエス様ご自身はどうであられたか。ゲッセマネの園でイエス様は祈られました。「父よ、どうかこの杯を取り除けてください」と3度も繰り返して、必死に祈られました。そしてその後、「父よ、私が願うことではなく、御心に適う事が行われますように」と祈られます。そして捕えられ十字架に架かられたのです。

◆そのような次第で食物、病気、命のことは、人間として大事な事柄です。そしてそれを突き抜けて行く道、そこにイエス様が歩まれた道、神様が求め給う道があります。使徒パウロはガラテヤ書の末尾で言っています。「私はイエス様の焼き印を身に帯びている」と。「焼き印」は、当時、奴隷に焼き印を押す習慣がありました。パウロの体には幾つもの十字の傷があった事でしょう。ロバの背中には十字の模様があるそうです。この子ロバは、イエス様によって神様の御心が遂行されるために用いられました。私たちは、私たち如き者を常に担って歩んで下さるイエス様に繰り返し感謝いたします。それは当然のことです。けれども私たちがイエス様を負って、背中に十字架の印が残るようでないならば、わたしたちはこの子ろばに顔向けができません。今日の箇所を通して、私たちはもう一度神様が本当に目指しておられる道の何たるかを弁え、私たちも弱く小さい者ながらも、イエス様を担って歩くのでないならば、世界の平和を祈願することも空しいのではないのでしょうか。

◆お祈りいたします。

憐み深い主イエス・キリストの父なる神様

どうか私たちがイエス様によって示されているあなたの御心を、全身で受け留め、御心に適う歩みを為し、平和を造り出す者としてください。この祈り主の御名を通し御前におささげいたします。アーメン。